

埋文にいがた

MAIBUN

新潟県埋蔵文化財センター

MAIBUN
NIIGATA

2018 Sept.

第104号

発掘調査
遺跡・整理
遺跡紹介

柏崎市 丘江遺跡・山崎遺跡



表紙：丘江遺跡Ⅶ 完掘状況 平成30年9月撮影



平成30年度
発掘調査
遺跡の紹介

丘江遺跡 VII

—鎌倉から室町時代の村—

所在地：柏崎市茨目3丁目

丘江遺跡は柏崎平野北西部、鯖石川左岸の沖積地に位置します。国道8号柏崎バイパス建設に伴って、平成26年度から発掘調査を継続しています。平成30年度も2地点で調査を行っており、今回で7次となる発掘調査区は、丘江遺跡の道路法線のなかで最も南側に当たります。地表には江戸時代以降に造られた屋敷地を区画する高さ約1.5mの土塁が見られました。

ご紹介する鎌倉～室町時代（中世）の集落は現在の地表から約1.2m下で見つかりました。遺構は掘立柱建物・井戸・土坑・溝などがあります。溝のなかには方形に巡ると想定されるものがあり、屋敷地を区画していたものと考えられます。井戸は50基以上もあり、これまでの調査同様にたくさん見つかりました。大きさは直径70cm～1mの円形の井戸が多く、なかには1.5m程と大型もあります。深さは1mを超えるものが大半で、1.5m以上のものもありました。これらの井戸は、すべてが石組や側板などを持たない素掘りでした。

た。井戸の堆積土の途中に土師質土器（素焼き土器）の皿や箸など木製品がまとまっている出土状況もあり、一部の井戸では埋め戻しの際に祭祀が執り行われていたと考えています。

遺物は溝や井戸を中心に出土していて、土師質土器、珠洲焼・越前焼・青磁・瀬戸美濃焼などの陶磁器、漆器・箸・曲物・柱根・杭などの木製品、砥石・石臼などの石製品があります。このほか、焼けた礫が多く出土しています。

今回の調査では、建物の柱穴や井戸を中心に多くの遺構を検出しています。そして、これらの遺構は集中する地点が認められます。今後、整理作業を進めていくなかで、集落の構造や時代による変遷、そして当時の人々の暮らしぶりなどを明らかにしていきたいと考えています。また、天目茶碗や茶臼と考えられる石臼など所有者の地位を示すとみられる特筆すべき遺物もあり、丘江遺跡に暮らした人々の社会的な階層を探ることも課題の一つとなります。（株式会社大石組 南波 守）



井戸遺物出土状況 土師質土器・青磁



井戸遺物出土状況 箸など多量の木製品



区画溝断面（上幅約2m）



出土遺物



29年度
整理作業
から

山崎遺跡

—有力者がいた鎌倉時代から室町時代の村—

所在地：柏崎市大字藤井字山崎1691-1ほか

山崎遺跡は柏崎平野の北西部、日本海からは約3km内陸、鯖石川左岸の標高約5mの微高地上に位置します(図1)。国道8号柏崎バイパス建設に伴い平成22・26・27年度に発掘調査を行いました。平成29年度は平成26・27年度の調査地点について本格的な整理作業を実施しました。平成22年度の調査地点については、翌年の平成23年度に発掘調査報告書を刊行しています。

平成26・27年度は、2年間で合計14,702㎡の面積を発掘調査し、鎌倉時代から室町時代(13~15世紀)の集落跡が見つかりました。

遺構は、掘立柱建物、井戸、土坑、杭列、土塁、溝、水田跡などがあります。掘立柱建物は41棟確認しました。東西に伸びる微高地に沿って建てられていました。最大のものは身舎が5×2間で2面に廂または縁が付くもので、総面積は94.5㎡になります(図2)。井戸は184基検出しました。全て素

掘りのものです。土塁は集落を東西に2分する溝に沿って築かれており、高さは約80cmの小規模なものです。作られた年代は15世紀以降と考えています(図3)。水田は東西に伸びる微高地の南側と北側で確認しました。

出土遺物には土器・陶磁器、木製品、石製品、金属製品があります。土器・陶磁器には土師質土器・珠洲焼・青磁碗・白磁皿などのほかに、瓦器風炉(図4)・青白磁梅瓶・中国製天目茶碗・古瀬戸水滴などの優品があります。石製品は茶臼(図5)・硯、石鍋を再加工した可能性がある滑石製品などが出土しています。

土塁や大型の掘立柱建物が存在し、出土遺物にも優品がみられることから、山崎遺跡からみつかった鎌倉時代から室町時代の村には、有力者が住んでいたと考えています。(春日真実)



図1 遺跡近景(南から)



図3 土塁断面(南から 高さ約0.8m)



図2 掘立柱建物(南から 長さ13.9m)



図4 瓦器風炉
*破片の幅約14cm

図5 茶臼
*直径約19cm



埋文
インフォ
メーション

平成30年度巡回展

縄文の造形美—六反田南遺跡と火焰型土器— 開催します

糸魚川市の海辺から姿を現した六反田南遺跡。約5,000年前の縄文時代中期の土器は、火焰型土器とは異なる流麗な造形美にあふれます。大量に作られた蛇紋岩製の磨製石斧は特産品として県内外に流通し、それを求めるかのように各地の土器も見つかりました。平成29年度の巡回展資料を入れ替え、さらに魚沼・村上・佐渡の火焰型土器を加えた156点を展示します。本展をとおして、文化の丁字路として活発な交流が行われた縄文時代中期の新潟県を見つめてみませんか。

- ◆ 日時：平成30年12月21日(金)～平成31年
3月24日(日) 9:00～17:00
- ◆ 会場：新潟県埋蔵文化財センター
- ◆ 観覧料：無料

- ◆ 関連講演会：定員80名（当日定員になり次第締切、申込み不要）
時間 13:30～15:30
会場 当センター

- 1月27日(日)
「石器製作技術から見た縄文時代の「伝統」」
沢田 敦（当センター）
- 2月17日(日)
「翡翠文化を探る」
木島 勉氏（糸魚川市教育委員会）
- 3月17日(日)
「石斧作りの縄文村—六反田南と長者ヶ原—」
岡村道雄氏（元文化庁主任文化財調査官）



糸魚川市 六反田南遺跡の天神山式土器
(高さ39cm Photo by T.Ogawa)



魚沼市 正安寺遺跡の火焰型土器
(高さ24.1cm 魚沼市教育委員会蔵)



佐渡市 長者ヶ平遺跡の火焰型土器
(高さ40cm 佐渡市教育委員会蔵)



村上市 高平遺跡の火焰型土器
(高さ24.1cm 村上市教育委員会蔵)



埋文
コラム

珠洲焼壺に入った一括出土銭 — 埋納か備蓄か —

国道8号柏崎バイパス建設に先立つ発掘調査で平成15年に発見された柏崎市東原町遺跡の珠洲焼壺と銭貨をご紹介します。

遺跡は柏崎平野を蛇行する鯖石川左岸のすぐ近くにあり、市街地からは2.5km程の距離です。溝に区画された掘立柱建物4棟や宴で使用した素焼き土器の小皿（かわらけ）をまとめて捨てた土坑もあることから、13世紀後半から14世紀代（鎌倉時代後期から南北朝時代）に栄えた、鯖石川下流域の中心的な集落の一つとみられます。

壺と銭貨は、3間×1間の東西に長い掘立柱建物の北東隅の柱から外へ約2m離れた場所に埋められていました。杉板の壺の蓋を取ると土にまみれて、紐を通して連なる銭（緡）が詰まっていた（図1）。この容器は口径22.3cm、高さ37cmで口縁が少し欠けているほかは完形の珠洲焼壺で14世紀初め前後に能登で焼かれたものです。壺には10,674枚の銭貨が入っていました（図2）。紐を通した緡が大半でバラ銭は54枚だけです。取り出すと33本の緡がありました。1緡に銭97枚のものが4本、銭194枚で1緡もあります。一番多くは銭684枚の緡もありました。よく見ると紐の途中を結んで節を作り銭97枚に分けたものが65個（節）と節で分けしたものの6割を占め、銭194枚で節を作るものも5つあります。

出土銭には、わが国で奈良時代から平安時代に铸造した、皇朝十二銭は含まれていませんでした。中世においては国内では銭貨を公には铸造せず、中国から輸入して流通させていました。中国本銭（中国公铸銭）と共に中国私铸銭や国産の模铸銭も普及していた時代です。銭種は（中国）北宋銭30種9,193枚、86%、唐銭3種1,050枚10%、南宋銭18種306枚3%が上位です。最新は陳（ベトナム）の紹豊元寶（1341年初铸）です。これらが埋められた年代は最新銭の年代から14世紀中頃以降と考えられます。

大量に発見される銭貨を一括出土銭とも呼びます。お金を埋めた理由は、土地の神に捧げるもの

の、建物などの境界に埋め安穏や繁栄を願う埋納説。混乱した世情を避けるため、あるいは商いのために備蓄したものとも言われています。埋めた目的を探るには、当時の集落の生業や遺跡相互の関係などを解明しなくてはなりません。また、銭貨をよく観察して中国本銭と模铸銭の区別や構成比率の検討も欠かせない課題です。（田海義正）



図1 珠洲焼壺に銭貨を発見



図2 珠洲焼壺と銭貨



県内の
遺跡・遺物
102

門新遺跡出土品335点

(平成19年3月23日 県指定有形文化財(考古資料))

遺跡所在地：長岡市上桐

遺物保管：長岡市(長岡市立科学博物館)

門新遺跡は、越後平野西部の西川へ注ぐかつての島崎川(現在の郷本川)右岸に立地する平安時代(10世紀)の遺跡です。周辺には奈良・平安時代(8~9世紀)の役所に関連した八幡林官衙遺跡や下ノ西遺跡があり、ここが古志郡の中心地域であったと考えられています。

平成6年の県営ほ場整備事業に伴う発掘調査では、河川の自然堤防上に区画を伴う建物群が見つかりました。最盛期となる10世紀前半には、有力者の居宅と考えられる平面積209㎡の廂付建物(主屋)や副屋・鍛冶工房・倉庫・井戸屋など7棟の建物が整然と配置され、河川に接する部分には船着場が備えられていました(図1)。

遺物には椀や皿などの食器、煮炊き用の鍋や釜、水や穀物などを貯蔵する甕や壺といった日常的に使用する土器(須恵器・土師器)のほか、灰釉陶器や緑釉陶器など高級な焼き物も少数含まれます。また鍛冶に使用する鞆の羽口や鉄滓、漆

塗り作業に関わる漆パレットや漆紙などが出土しました。漆紙とは漆の樹液を乾燥から守るため蓋に使った使用済みの紙(文書)のことです。偶然にも文字の部分に漆が付いて固まり、腐らずに残ったものは漆紙文書と呼ばれ、これを解読することで当時の社会の様子を知ることができます。

門新遺跡では主屋の雨落溝から漆紙文書が新潟県で初めて発見されました。そこには「延長六年(928年)」という年代や「米」「大刀」「船」などの文字が確認されました(図2)。その内容は物品の請求に関わるものと考えられ活発な経済活動が遺跡周辺で行われたようです。この背景には9世紀後半以降の律令体制の揺らぎと開発領主と呼ばれる富豪層の台頭があり、門新遺跡でもこうした支配者層がいたことを物語っています。このように門新遺跡出土品は10世紀前半の島崎川流域を新たに支配した富豪層の活動を具体的に示すものです。また、漆紙文書の解読により年代が判明したことは地域の古代史を考える上で貴重な資料であり、出土品335点が新潟県有形文化財に指定されています。

なお、長岡市立科学博物館では漆紙文書の複製品を見学することができます。(丸山一昭)



図1 建物群と河川跡



図2 漆紙文書(赤外線写真から作成)

